

プレヴェールと「10月グループ」

吉田正明

Prévert et le groupe Octobre

Masaaki YOSHIDA

はじめに

1931年、プレヴェールはマルセル・デュアメル、イヴ・タンギー、そして彼の6歳下の弟ピエールら陽気な仲間たちとともにシュールレアリスム運動に深くかかわった後、彼らの根城であったシャトー街54番地をあとにする。時代は、経済危機が深刻化し、プロレタリア階級はますます悲惨な状態に追い込まれ、一方でエリート階級の怠慢と腐敗は進行し、国粋主義の脅威が迫っていた。もはや社会に背を向けて前衛的な超現実主義の美学のみを追求しているときではなかった。サルトルの言葉を借りれば、アンガジュマンのときが到来していた。そのような社会情勢の中、プレヴェールは映画の世界に本格的に身を投じる前に、社会の不正を糾弾しプロレタリア運動を支持し鼓舞する上でおおきな役割を果たすことになる演劇の世界でまずその才能を発揮することになる。レオン・ブルムを首班とする右翼政党連合の人民戦線が樹立される1936年までの5年間、プレヴェールは「10月グループ」Groupe Octobre という労働者階級のための劇団と深くかかわるのである。

「10月グループ」は、ソヴィエトのアジ・プロ agit-prop (agitation-propagande の略で、革命グループの活動、扇動的宣伝の謂)の流れをくみ、共産党と連帯したアマチュアを中心に構成された劇団であった。作家としてはその名をまだほとんど知られていなかったプレヴェールは、その劇団のために寸劇 sketches やシュプレッヒコール chœurs parlés のシナリオを書き、辛辣な風刺と滑稽なパロディーを巧みに盛り込んだテキストを創作し、その劇団を人々の耳目をひくラディカルなアジ・プロ劇団にしていったのである。

このようなプレヴェールの初期の創作活動については、日本ではまだあまり知られていないと思われる。本稿では、プレヴェールが10月グループと深くかかわった初期の時代に焦点を当て、その代表作のいくつかを紹介しつつ、その軌跡を追ってみたい¹⁾。

1. 「プレミス」Prémices²⁾から「グループ・ド・ショック・プレミス」へ

1917年の10月革命以来、ソヴィエト政府は革命の正当性を労働者や兵士や農民たちに喧伝すべく、ポスター、新聞雑誌、映画、そして演劇など様々な媒体や手段を通じて広範囲にわたり扇動的宣伝を繰り広げた。こうした流れを受けて、兵士や労働者などのアマチュアで結

成されたアジ・プロ (agitation-propagande) の劇団が誕生し、プロの役者もそれに加わりながら次第にソヴィエト国内に浸透していったのである。やがてこの革命的アジ・プロ演劇活動はソヴィエト国内にとどまらず、ドイツ、フランスをはじめヨーロッパ各国にも波及していくことになる。フランスにおいては、「フランス労働者演劇連盟」Fédération du théâtre ouvrier de France (略称 F.T.O.F.) が組織され、その連盟内部で複数のアジ・プロ劇団がパリ市内や労働者の住むパリ郊外に次々に誕生していった。「大衆」Masses, 「十二」Douze, 「三月」Mars, 「戦闘」Combat, 「まなざし」Regards などがそれである。

「プレミス」もそのようにして共産党の支持を得て1931年に誕生したアジ・プロ劇団の一つであった。その前身は、それより4年前の1927年、エチエンヌ・ドゥクルー Etienne Decroux, ジャン・ドルシー Jean Dorcy, ロジェ・ルグリ Roger Legris たちを中心に結成された劇団であったが、それが分裂して出来たのが「プレミス」であった。これは労働者、会社員、教員などのアマチュアの団員が主要メンバーであったが、数名のプロの役者も含まれていた。当時この劇団を率いていたのはプロの役者のロジェ・ルグリであった。彼らは労働組合によって催された祝祭や集会の際に、様々な場所を借りて労働者たちの前で劇を演じていた。彼らが主に演じていたのは、ポール・ヴァイアン・クチュリエ Paul Vaillant-Couturier³⁾ やレオン・ムシナック Léon Moussinac⁴⁾ などの共産党知識人の書いた作品であったが、ときにはメリメヤオクターヴ・ミルポーの劇などを演じることもあった。1932年にこのアジ・プロ劇団「プレミス」は分裂する。なぜなら、劇団の主催者であったロジェ・ルグリやガストン・バティ Gaston Baty, あるいはジョルジュ・ヴィトレ Georges Vitray といったプロの役者たちは、革命思想よりも芸術的価値の高い作品の上演を目指していたのに対し、ドイツのアジ・プロ劇団の活動に衝撃を受けて帰国したラザール・フュシュマン Lazare Fuchsmann⁵⁾ や、ギ・ドゥコンブル Guy Decomble⁶⁾, レイモン・ビュシエール Raymond Bussièrès⁷⁾, シュザンヌ・モンテル Suzanne Montel⁸⁾ などの他のメンバーたちは、ヴァイアン・クチュリエとムシナックとも協同しながら、労働者の側に立って思想的立場をより鮮明に打ち出すことを望んだからである。後者の一群は、「グループ・ド・ショック・プレミス」Groupe de choc Prémices (以下「ショック・プレミス」と略称する) と劇団名を変更して再出発することになる。

2. プレヴェールの登場

1932年に劇団「プレミス」が分裂した頃、プレヴェールは当時親しかったジャン・ポール・ドレフュス Jean-Paul Dreyfus (後に le Chanois と称するようになる)⁹⁾ とともに、こうしたアジ・プロ劇団の演じる寸劇を見るため労働者たちの会合にたびたび足を運んでいた。そのような折、「革命的作家芸術家協会」Association des écrivains et artistes révolutionnaires の集会の席で、彼らは「プレミス」と深くかかわっていた『リュマニテ』*L'Humanité* 紙編集長ヴァイアン・クチュリエと共産党知識人で演劇批評家のムシナックと知り合いになる。そのとき、新たに再出発した「ショック・プレミス」は自分たちの革命的演劇の台本にふさわしい作者を探していた。ヴァイアン・クチュリエとムシナックは、この熱烈な演劇集団にプレヴェールをその作者として勧めたのである。団員のレイモン・ビュシ

エール（当時デザイナーとしてパリ市役所の公務員を勤めていた）はさっそくプレヴェールにコンタクトを取り時局にあった作品の依頼を申し出るのである。当時プレヴェールはまだ作者としてはほとんど無名に近い存在であった。それまでに映画や演劇の雑誌に発表された数編のテキストを除けば、プレヴェールの作品としては『ビフェール』*Bifur*や『コメルス』*Commerce*といった文芸誌に発表された《Tentative de description d'un dîner de tête à Paris-France》¹⁰と《Souvenirs d'une famille ou l'ange garde-chiourme》¹¹の2編が公にされただけであった。しかし彼らはプレヴェールの書いたこの2編の作品に盛り込まれた辛辣な風刺と大胆なパロディーに着目していたのではなからうか。これらの初期作品にはすでに激越な反教権主義や、あらゆる権力に対する反抗や辛辣なパロディーが、言葉遊びとともに随所にちりばめられていたからである。

最初の会合は1932年4月12日にプレヴェール宅（パリ14区のシャトー街から程遠からぬDuthyの邸宅）で行われるはずであった。ところがその前夜の11日に、プレヴェールと親しかった役者のピエール・バチエフ Pierre Batcheff（プレヴェールは彼のために弟のピエールと2編のシナリオを書き残している）が31歳の若さで自殺する。この友の予期せぬ死に衝撃を受けたプレヴェールは予定されていた邂逅の延期を申し出る。数日後、落ち着きを取り戻したプレヴェールは「ショック・プレミス」の団員を自宅に迎え、彼がムシナックのために書いた滑稽なテキストを彼らの前で朗読する。そのとき同席していたのは、ラザール・フュシュマン、レイモン・ビュシエール、ジャン・ルベス Jean Loubès¹²、そしてアルレット・ベセ Arlette Besset¹³たち、いずれも共産黨員ではあったが、労働者階級ではない団員たちであった。

この彼らの訪問の1週間後に、今度はプレヴェールの方が仲間のジャン・ポール・ドレフュスとルー・チムコウ Lou Tchimoukow¹⁴とともに、ベルヴィルのマチュラン・モロー通りにあった労働組合会館での彼らのリハーサルを見学に行く。その時プレヴェールは彼らのために時事的でホットな話題を扱った劇の台本を書く約束をするのである。

3. 『新聞万歳』 *Vive la presse* の創作と「10月グループ」への改称

「ショック・プレミス」の団員とプレヴェールとの最初の邂逅が予定されていた1932年4月12日は、奇しくも国民議会選挙に向けた選挙戦が開始された日でもある。そこで選ばれたテーマは、ジャーナリズムと政財界との癒着の告発であった。着想したのはアルレット・ベセであった。さっそくジャン・ポール・ドレフュスが新聞の収集にあたり、それに基づいてプレヴェールは当時の新聞を風刺する寸劇を彼らのために書くのである。ビュシエールは作品披露の様子を次のように回想している。

彼（プレヴェール）は、最初の会見から数日後にルー・チムコウという名の友達とともに『新聞万歳』*Vive la presse*という作品を携えて再び訪ねてきた。彼はそれを朗読し、チムコウが演出についていくつか指示を与えていた。そしてわれわれはその日ポール・ヴァイアン・クチュリエがすぐれた嗅覚の持ち主であったことを知ったのである。（中略）われわれは知人たちとともに労働者のために闘いたいという欲望を抱いていた。ジャックはやさしく、そして明晰であった。彼のやさし

さは彼の明晰さから来ていた。なぜなら彼はすべてを心得ており、すべてを理解していたからである。彼は生来の知性の持ち主であった。¹⁵⁾

このように「ショック・プレミス」の団員たちの心をとらえた『新聞万歳』は、パリ郊外のアティス・モンズで、ストライキに参加した60人の建設業労働者たちの前で、1932年4月25日に初演される。

ところで、この劇の最初のリハーサルのときに、プレヴェールとともに「ショック・プレミス」の一員に加わり、この劇の演出を手がけることになったルー・チムコウことルー・ボナンは、1917年のロシア革命に因んで劇団の名前を「ショック・プレミス」から「10月グループ」に改名することを思いつく。自らもロシア風のチムコウという名前を名乗ったロシア好きの発想であった。こうして、以後1936年の解散まで「10月グループ」という劇団名が正式に採用されることになったのである。

配役は、ジャン・ポール・ドレフュスが資本家 *le capitaliste*、プレヴェールが『人民の友』 *L'Ami du peuple*、ポール・グリモが『ラントランスイジャン』 *L'Intransigeant*、レイモン・ビュシエールが『ル・ポピュレール』 *Le Populaire*¹⁶⁾、ジャック・ベルナル・ブリュニウス Jacques-Bernard Brunius¹⁷⁾ が『ル・タン』 *Le Temps*¹⁸⁾、ジャン・ルベスが『ルーヴル』 *L'Œuvre*¹⁹⁾ を演じた。

この寸劇は1932年4月にアティス・モンズで労働者たちの前で初演された後、翌月にはガルシュGarchesのリユマニテ祭 *Fête de L'Humanité* で再び上演されることになる。そしてその後選挙戦の間、『新聞万歳』は、学校の校庭、各地の市役所、労働組合や共産党の事務所などで「10月グループ」によってたびたび演じられ、喝采を浴びていくのである。グループのなかで写真を担当していたジャック・アンドレ・ボワファール Jacques-André Boiffard²⁰⁾ にしてもイヴ・アレグレ Yves Allégret²¹⁾ にしても、彼らは同時に役者でもあったため、「10月グループ」の舞台を記録した写真はほとんど残されていないが、彼らの秘書を務めていたアルレット・ベセは劇の上演の様子を次のように回想している。

それは指人形芝居 Guignol の舞台でした。舞台の奥の窓が人形芝居の舞台となっていました。舞台の両側にベンチが置かれ、観衆と編み物をする女性たちが配されました。それから登場人物たちが映画撮影で使われていたコスチュームを一晩借用しそれをまとめて、件の指人形芝居の舞台となっていた窓に姿を現すのです。私はジャン・ポール・ドレフュスが演じた脱走兵の母親の役を演じました。²²⁾

この劇の上演の様子を撮影したわずかに残された2枚の写真を見ても²³⁾、また上の証言からも窺えるように、これはリヨン名物の滑稽なギニョール指人形芝居仕立てで作られたパロディー劇であり、そこでは当時のジャーナリズムに蔓延していた政治家たちとの妥協や、拝金主義、あるいは権力者たちの欺瞞や不誠実が容赦なく糾弾されているのが推察されるのである。映画俳優から借りた衣装をまとった彼らの姿顔つきは滑稽そのものである。例えば黒ぶちの丸眼鏡をかけたラザール・フェシュマンや白いぼさぼさの顎鬚を付けたマックス・モリーズ Max Morise²⁴⁾ の演技が観衆の笑いを誘っているが見て取れる。ベンチに座って待機

している『民衆の友』役のプレヴェールも、ハンチングに黒い口髭を付けて仲間たちの演技を嬉しそうに眺めているのが分かる。

実際の人物を登場させて風刺するのもこうしたアジ・プロ劇の特徴の一つである。つまりそれぞれの新聞の名前が役者に配されているだけでなく、実はその背後に特定の編集長や主幹が槍玉に挙げられているのである。例えば『ル・ポピュレール』が当時共産党の格好の標的となっていた代表のレオン・ブルムを暗に風刺しているという具合である。

ところで通常の文学的演劇とは異なり、労働者のために共産主義思想を喧伝するために活動したアジ・プロ劇団は、ストライキ中の工場やカフェや学校の校庭などの野外で寸劇を演じることが多かった。観客も労働者を中心とした一般大衆であった。観衆が劇に飛び入りで参加し、観客と一体となって劇が作られていくこともしばしばあった。彼らは常に社会的、政治的時事問題に関するホットな話題をテーマとして取り上げ、彼らの日々の諸問題を真摯に、しかしそれを誇張したり痛烈な皮肉を交えて表現したのである。台本はしばしば前日に書かれ、そして前夜にリハーサルを行っただけで翌日に演じるということもよくあった。筆の速さと即興的才能が作者には求められたのである。プレヴェールはまさに彼らが求めているうってつけの人物であった。ル・シャノワことドレフェスは次のように回想している。

われわれの寸劇は始まってからだいたい1時間から2時間ほど続いた。1時間の間ずっと突飛な会話や話題の飛躍や才気に溢れた対話が続くのである。そこにはまさしくジャック・プレヴェールの天賦の詩的才能が脈打っていた。(中略)

ジャックはわれわれの中で規律に従おうとしなかった唯一の劇団員であった。上演のたびに彼はテキストを変えていった。そして観客が爆笑しているのを見ると、彼はテキストの即興の変奏をさらに続けるのであった。²⁵⁾

またフッシュマンはこのような滑稽で奇想天外なプレヴェールのことを「バスター・キートンのようだった」²⁶⁾と後に述懐している。

以上のような創作や上演の経緯もあって、プレヴェールが「10月グループ」に最初に提供したこの『新聞万歳』は、残念ながらすべてのテキストが残っているわけではなく、その一部が知られているだけである。しかし台詞の断片や末尾に付されたシュプレヒコールの節々に、ドレフェスが指摘したようなプレヴェールの詩的才能を、権力者や社会の不正や腐敗に対する辛辣な風刺とともに窺うことができる。しかしそれ以上にここで着目すべきは、そうした風刺やパロディーをよりいっそう引き立たせるプレヴェール流の地口や言葉遊びがすでに散見されることである。一例を挙げるなら、ブリュニウスが扮した『ル・タン』 *Le Temps* とドレフェス演じる資本家とのやりとりにそれを見ることができる。

Le Temps, se levant. (ル・タンは立ち上がり)

Je suis *Le Temps*. Je suis pressé. Je n'ai pas le temps.

「私はル・タンだ。急いでいる。時間がない。」

Le Capitaliste, *le regarde* (資本家は彼を見て)

Beau temps! Non! Restez couvert!²⁷⁾

「良い天気だ！いいや！帽子はかぶったままでどうぞ！」

このちぐはぐな会話は、《le temps》という語が持つ「時間」と「天候」という二つの意味の取り違いから成り立っている。さらには *Le Temps* という新聞が「急いでいるので時間がない」と言っている台詞も言葉遊びで笑いを誘うと同時に、新聞記者たちの無反省な速筆を皮肉ってもいるのである。資本家の《Restez couvert》という台詞も、「帽子をかぶったままでいい」という意味と、「曇ったままでいい」という《couvert》という語の多義性にかけての地口となっている。ドレフュスも回想していたように、プレヴェールは話題の飛躍やちぐはぐでかみ合わない会話をこのように巧みに織り交ぜながら、上演のたびに即興的にテキストを変奏させつつ観客の笑いを誘う手腕に長けていたのである。

このようにプレヴェールが「10月グループ」のために最初に書いた『新聞万歳』は、試金石として創作されたものではあったが、一般大衆を受け入れられ成功裏に上演が続けられたことは、1934年まで2年間に渡ってこの作品が彼らのレパートリーに入っていたことから窺うことができる。

4. 『パリ・コミューヌ追悼』 *Commémoration de la Commune*

1932年に「10月グループ」はパリ・コミューヌの追悼式においても劇を披露する。1871年5月21日から28日にかけての「血の1週間」の追悼式は、1880年に左翼勢力により公式の行事になって以来、毎年5月の最後の週にペール・ラシェーズにおいて執り行われることになっていた。現在もおペール・ラシェーズ墓地にある連盟兵の壁 *le mur des Fédérés* はパリ・コミューヌの闘士たちの抵抗と殉教のシンボルとなっている。147人の闘士たちが5月28日にそこで政府軍により銃殺され葬り去られたからである。

1932年の追悼式は5月29日に執り行われた。そこではペール・ラシェーズでの行進に続き、急進的左翼の催す様々な行事が見られた。当時はパリ・コミューヌとその鎮圧の記憶がまだそれほど薄れてはおらず、その光景を子供のときに目撃した人たちも多かった。コミューヌの闘士たちもわずかながらまだ生き残っていた。そのとき「10月グループ」が上演した劇のテキストの作者がプレヴェールかどうかは定かではない。その抜群の記憶力がよく知られているレイモン・ビュシエールの証言にも矛盾した点が見られる。その証言を拾ってみると、「このテキストがだれのものかまったく知らないし、だれが書いたものか聞いたこともない」と最初証言していた彼が、「これはペール・ラシェーズでのパリ・コミューヌの追悼式の際に書かれた初期の頃の10月グループの台詞で、だれが書いたものかまったく分らない。しかしそれがジャックの書いたものでないことは確かだ」と明言している。ドレフュスによると、「ルー・ボナンを中心に数人が協力して書いたもの」であるという。またイヴ・アレグレはプレヴェールが書いた可能性があることを示唆している²⁸⁾。

残されたテキストを見てみると、そこには、「流されたすべての血のうち、一滴たりとも失われたものはない」、「連盟兵の壁は牢獄の壁よりも堅固に立っている」、「牢獄は崩れ去るだろう、教会は崩れ去るだろう、しかしこの壁は3万人の死者たちの血で赤く染まりながらなお立ち続けるだろう」、「ティエール、ガリフェ、ヴェルサイユ軍、やつらの売春婦ども、

やつらの犬どもはくたばる」といった激越な言葉が断片的に寄せ集められており、皮肉やパロディーや言葉遊びの要素は見られない。これはおそらくドレフュスが指摘しているように、数人の劇団員たちが協力して書いたテキストであり、プレヴェールが関与していたとしてもそれはごく部分的なものであったと思われる。ずば抜けた記憶力を誇ったレイモン・ビュシエールの証言があいまいであるのも、そのためではなかろうか。もしプレヴェール一人の作であるのなら、このような矛盾したあいまいな証言は残さなかったに違いない。

これは普通の劇というよりは、パリ・コミューヌの歴史を言葉で素描したシュプレッヒコールである。配役も台詞を担当しているのも、特定の人物ではなく、「全員」、「女たち」、「男たち」、「3人の男」、「一つの声」、「ソロ」、「半合唱」というふうに集団で演じ語る形式になっている。観衆にパリ・コミューヌの思い出を呼び起こし、その思想を共産主義や革命思想と結び付けることを目的として上演されたものなのである。この劇は最後に全員でフランス革命のときに作られみんなで歌われた「カルマニョル」を合唱して、「パリ・コミューヌ万歳」という斉唱で幕を閉じる²⁹。このようにこれは、彼らの革命的思想が明確に打ち出された典型的なアジ・プロ劇であったのである。

5. 『ヒットラー登場』 *L'Avènement d'Hitler* と 『シトロエン』 *Citroën*

アドルフ・ヒットラーが権力の座についたのは1933年1月30日のことである。プレヴェールが、この黒いちよび髭をはやした男がドイツの新首相になったのを知ったのは、そのとき彼がシナリオを書き役者としても出演していたクロード・オータン・ララ監督の『あさつき』 *Ciboulette* という映画の撮影中のことであった。プレヴェールはすぐさまこの男が危険人物であることを察知し、ヒットラーを題材にしたシュプレッヒコールを含んだ時事的風刺劇を即座に書き上げ、それを「10月グループ」に新作として提供する。よほど緊急を要することと判断したのか、この劇はヒットラーが首相となったニュースを知った直後の1933年1月30日にはすでに書き上げられ、リハーサルと本番の舞台をビュリエ・ダンスホールにおいて、小商店主たちの会合の席で行うのである。そして劇の上演中には、数日前にベルリンの街路で撮影されたナチスによる暴行の様子が幻灯機により投影されたのである。シュザンヌ・モンテルはそのときの状況を次のように回想している。

事件は悪化の一途を辿っていた。ある夜、「革命的作家芸術家協会」の血染めの新聞が出版されたが、その新聞は差し押さえられた。ヒットラーが権力の座についたことを報じていたからである。大量虐殺はまだ始まったばかりであった。(中略)

この合唱劇のリハーサルはすばやく行われた。ヒットラーという言葉が発せられたとき、褐色の下着を身につけて、髪を額に垂らし、血走った目で幻覚を追うように一人の男が舞台に登場した。ジャックであった。³⁰

このように作者自らがヒットラーを演じるという熱の入れようであった。まずはじめのシーンでは、ニューヨークの銀行や証券取引所の閉鎖が話題にされ、繁栄を誇った国が経済恐慌に見舞われる様子が暗示され、ブルジョワは涙を流して歯を軋らせる。事態の悪化は避

けられない。プレヴェールならではの皮肉が感じられる台詞を見てみよう。

Comme ce grand homme mythologique
 Qui n'était sensible qu'au talon
 Le bourgeois n'est sensible qu'au fric
 Même quand on lui joue du violon.

Il tuerait bien tout le monde pour garder sa maison
 Mais il ne peut pas tuer lui-même
 Il faut qu'on croie qu'il est bon³¹⁾

このように自分の踵のことばかり気にしているギリシャ神話のアキレウスに喩えられているブルジョワは、しかしながら神話の英雄とは次元が異なり、すばらしい音楽の演奏を聞くときでもお金のことだけしか頭にないと風刺されるのである。彼はまた自分の財産や家を守るためなら、だれかれなく殺してしまうのに、自らを殺すことはできない意気地なしなのである。そして自分が善良であることを是が非でも信じ込ませなければ生きていけない存在でもある。

さて、プレヴェール演じるヒットラーはどのように描かれているのであろうか？

Hitler...Hitler...Hitler

L'homme de paille pour foutre le feu
 Le tueur
 Le provocateur...

On présente d'abord le monstre en liberté
 On le présente aux ouvriers

« C'est un ami presque un frère
 Un ancien peintre en bâtiment. »

Le moindre mal ! Quoi !

(...)

Et maintenant

Les quartiers ouvriers sont peints couleur de sang³²⁾

ヒットラーは「殺し屋」、「扇動者」、そして「ダミー」homme de paille と形容されている。「homme de paille」という表現は、怪しげな目的を持つ事業の共犯者の意味で使われるが、原義は「藁人形」という意味でもあり、火を放たれて焼かれる存在でもある。そこには二重の意味が含意されているように思われる。彼は鎖を解かれた「怪物」ではあるが、一見

すると「友」のようでもあり「兄弟」のようでもある。そして「かつての塗装職人」でもあるが、化けの皮を剥がせば、強暴な「怪物」としての本性を露にして、「労働者の街を血の色に染めてしまう」危険人物なのである。まさに劇の進行と同時に幻灯機によりスクリーンに映し出されるナチスの暴力の化身なのである。

劇の最後に唱和されるシュプレッヒコールは、こうしたナチスの暴行に対して労働者たちの結束を力強く訴える。「労働者たちよ、君たちの人生は君たちのものである。それを奪われるままにしてはいけない。拳を握り締めよ。君たちの憎悪を具現化しなければならない。憎み、戦い、結束しなければならない。これまで以上にわれわれの叫びが轟く。すべての国のプロレタリアたちよ、結束せよ。」*«Prolétaires de tous les pays unissez-vous !»*³³⁾

はたしてプレヴェールが当時どれほどナチスの脅威を実感し見通していたかを知るすべはもはやないが、この作品は、囃らずも後のヒットラーとナチスの非人間的な蛮行を見事に予見し警鐘を鳴らしていたことが了解されるのである。ことほどさようにプレヴェールの洞見は鋭かったと言えよう。

ところで1933年は、フランスにおいて労働者のストライキ運動が高まった年でもあった。工場での労働者は、とりわけ自動車製造工場においては、劣悪な条件の下で過酷な労働を強いられていた。加速される作業速度、安全性の無視、事故の頻発、不安定な労働条件などの問題が共産党系の新聞でたびたび取り上げられ報じられていた。なかでもアンドレ・シトロエンの自動車工場は労働運動の坩堝となっていた。火種はくすぶっていた。そのような状況の中、職工長と一人の労働者の間に激しい口論が起り、逆らった労働者に対して即座に解雇通知が言い渡される事態となる。その部署で働いていた労働者たちは仕事を放棄し、それが徐々に工場全体に拡大していった。そこで働く労働者たちの意に反して給与カットが強引に行われた矢先のことであったため、不満が一気に爆発した形となった。そしてついに震源地となったサン・トゥーアンの工場で、1933年3月6日に600人の労働者たちが一斉にストライキに突入したのである。3月31日金曜日には、シトロエンの全工場の8000人の労働者たちが工場閉鎖をしてゼネストに突入し、ストライキ委員会も設置されて、かくして3か月に及ぶストライキが勃発することとなったのである。

プレヴェールは、役所で情報をいち早くキャッチしたレイモン・ビュシエールからゼネスト突入のニュースを聞くとすぐにこの事件を題材にしたシュプレッヒコール劇を書き上げる。シュザンヌ・モンテルは以下のように当時の模様を語っている。

劇が書き上るとすぐその日からリハーサルがはじまった（土曜の午後）。そのシュプレッヒコール劇はその日の夜にストライキ中の労働者たちの集会において上演された。ルー・チムコウの演出により、主要な登場人物が座るテーブルの上にテキストが置かれ、役者たちは演じながらその台本に目をやることができた。リハーサルの時間がほとんど取れないので苦肉の策が講じられたのである。そしてシャンソン「パリの屋根の下」（ルネ・クレール監督の同名の映画の主題歌）がシュプレッヒコールの間ずっと小さな声で歌われていた。³⁴⁾

マリーズ・ピオシュMaryse Piochはこの劇の誕生について異なる事実を伝えている。ストライキ中の労働者の代表が「10月グループ」のもとを訪れて、彼らの主義主張を正当化す

るような劇作を依頼したというのである³⁵⁾。もしこちらの証言の方が正しければ、アジ・プロ劇団としての「10月グループ」の活動は、すでに労働者階級の間で認知され注目されていたということになるだろう。

いずれにせよ、このシュプレヒコール劇は3月18日の夜にストライキ中のシトロエンの労働者たちの集会の場で初演されたのである。まずジャンヌ・フェシュマンが暗がりの中で語り始め、「汚れた悲惨な界限で、小さな光がかすかに輝く」という台詞のときに赤い光が灯される³⁶⁾。そしてその後マルセル・ジャン Marcel Jean³⁷⁾がテキストの大部分を担当し、他の団員たちは薄暗がり待機して、最後に全員で「ストライキ万歳」«Vive la grève!»のシュプレヒコールを斉唱するという筋立てであった。

小さな男である社長のシトロエンは、「頭の中に数字しかなく」、「鼻眼鏡の奥の目は汚く」、いつも同じ文句を繰り返している。「純利益は数百万、1日に車500台、600台」と。社長は「労働者の声など聞こえない」し、労働者のことを「古いタイヤ」としか見ていない。彼はドーヴィルやニースやカンヌのカジノに出かけ思う存分楽しむことしか頭にない。売上が落ちれば「生産スピードを上げ」、「給料をカット」するまでである。

このような非道な経営者の下で働かされている労働者たちは、手をこまねいているわけにはいかない。最後には逆襲が待っているであろう。

Ceux-là gardent encore une mâchoire de loup

Pour mordre

Pour se défendre

Pour attaquer

Pour faire la grève

La grève, la grève

VIVE LA GREVE!³⁸⁾

ここにはすでに、シトロエンという人物の風刺画を通して資本主義社会の拝金主義とあらゆる権力や権威に対する憎悪と怒りが、そして虐げられた人々への共感と連帯感が表わされている。そしてまたプレヴェール特有の言葉遊びも忘れられていない。シトロエン氏は金の力で中佐や将軍といった軍人、看守、スパイ、ジャーナリストをすべて牛耳っており、警視総監も彼の家の玄関マットに這いつくばって次のように名前を間違えて発音する。

Citron ? Citron ?

Millions, million...

自分の名前を「レモン」と取り違えられたシトロエン氏は、自分の正しい Citroën という名前を言うかわりに、いつも頭から離れない売上高の「数百万」と言ってしまうのである。ここに痛烈な風刺を読み取るべきであろう。レイモン・ピュシエールはプレヴェールの弟ピュシエールがベルギーのテレビ局の依頼を受けて制作した番組『私の兄ジャック』³⁹⁾に出演したとき、この『シトロエン』のテキストが失われてしまったことを残念ながら、「まったくそれ

は見事なテキストであった⁴⁰)ことを述懐している。しかし驚異的な記憶力の持ち主であった彼は、そのテキストの一部を記憶により復元してくれたのである。ピュシエールも洞察していたように、この『シトロエン』はプレヴェールの書いた風刺的・反抗的作品の中でも傑作の一つに数えられるものであり、今日もなお色褪せることなく、少しもその力強さを失ってはいないと言えよう。

以上見てきたように、プレヴェールは「10月グループ」の活動に積極的に参加し、当時悲惨な状態に置かれていた労働者たちのために、権力者の欺瞞や横暴、ジャーナリズムの腐敗、資本主義がもたらした貧富の差やブルジョワジーの拝金主義などを暴き、言葉遊びと辛辣な風刺とパロディーを巧みに織り交ぜながら、アジ・プロ劇の作者としてその才能を遺憾なく発揮しただけではなく、自ら役者としても舞台に立ったのである。唯一規律を守らぬ自由人として。プレヴェールはこのときすでに、反抗詩人としての相貌を呈していたと同時に、言葉と自由に戯れ、どのような固定観念にも捉われない自在なエクリチュールを身につけていたと言えよう。

註

- 1) プレヴェールと10月グループの関係を知る上で参考になる文献を挙げておく。まずプレヴェールが10月グループに提供したテキストの全体像をつかむには、*Jacques Prévert Octobre-Sketches et Chœurs parlés pour le Groupe Octobre (1932-1936)*, Textes réunis et commentés par André Heinrich, nrf, Gallimard, 2007. が最適の文献である。プレヴェールと10月グループとのかかわりを伝記的に知るには、Alain Rustenholz: *Prévert inventaire*, Seuil, 1996. が詳しい情報を与えてくれる。写真やポスターなどの資料は、Carole Aurouet (Préface de Bernard Chardère): *Prévert, portrait d'une vie*, Ramsay, 2007. に多く収められている。また、*Jacques Prévert, l'humour de l'art*, préface de Jacqueline Duhême et Légendes Carole Aurouet, Naïve, 2007. にも、多くの貴重な写真やユーモラスなプレヴェールのコラージュなどの資料が収められている。映像資料としては、1961年に彼の弟ピエールがベルギーのテレビのために録画した記録映像をDVDに収めた *Mon Frère Jacques par Pierre Prévert*, nouvelle version restaurée par Catherine Prévert, DVD Vidéo, Doriane films. において、レイモン・ピュシエールとの対談や、『シトロエン』などプレヴェールが10月グループのために書いた作品の紹介、あるいは1933年のモスクワへの旅の様子などが興味深く語られている。もちろんプレヴェール研究の第一人者であるラステール夫妻の編纂したブレイアッド版『プレヴェール全集』(2巻)も必須の参考文献である。*Jacques Prévert, Œuvres complètes I*, 1992, *Œuvres complètes II*, 1996, édition présentée, établie et annotée par Danièle Gasiglia-Laster et Arnaud Laster, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard. 参照。本稿執筆にあたって、これらの文献資料を適宜参照したことを断っておきたい。
- 2) *Prémices* とは、フランス語で本来は古代、ヘブライなどで神に捧げた「初物」「初穂」を意味し、そこから「処女性」「始まり」「第一歩」という意味に転義した単語である。
- 3) フランスの政治家、ジャーナリスト (1892-1937)。共産党中央委員会委員 (1921)、下院議員 (1919-1928, 1936)、『リュマニテ』*L'Humanité* 紙編集長 (1928)、「革命的作家連盟」会員。代表作は『友への手紙』*Lettres à mes amis* (1920)、『盲人の舞踏会』*Le Bal des aveugles* (1927)、『ソ連を守ろう』*Défendons l'U.R.S.S.* (1929)。

- 4) 「国際行動演劇」主催者, 映画・演劇の批評家, 歴史家, 演出家, 共産党知識人。
- 5) 1909年ユダヤ人の貧しい家庭に生まれ, 雇い主の好意により勉学を続け, 法律を修める。1930～31年にドイツに滞在。帰仏後, 共産党に入党し, 「プレミス」の団員となる。劇団分裂後, 「10月グループ」となる新しい劇団にプレヴェールを迎えるとき, 最初にコンタクトを取ったのは彼である。終生共産党を支持し続けた。1991年没。
- 6) 1910年生まれ。フュシュマン兄妹の紹介で「プレミス」に入団。「10月グループ」のために『それが演劇だ』 *Ça, c'est du théâtre* を書く。1964年没。
- 7) 1907年生まれ。父はゲード主義の闘士 (Jules Guesde (1845-1922) は, フランスにマルクス主義を導入し, 1880年にラファエルグとともにフランス労働党を結成した社会主義者の政治家)。1928年に共産党に入党。スペイン戦争勃発時に離党。ヴァイヤン・クチュリエの友人。役者となり, 最後まで10月グループに加わる。『リュマニテ』紙主催のコンクールで受賞 (*L'bestiau*)。『600フラン』 *Six cent francs* は『コムユース』紙に掲載された。文才に恵まれながら, 彼はなぜか「10月グループ」のためには作品を残さなかった。1982年没。
- 8) 1900年にユダヤ人の家庭に生まれる。パリで速記タイピストをしていた彼女は, 前衛劇にも足繁く通い, そして「プレミス」に入団。その後最後まで「10月グループ」の活動に秘書として, またコーディネーターとして積極的にかかわる。劇団が上演した作品や帳簿の類は彼女のおかげでその多くが保存されることになる。1936年以降, ロベール・デスノスの秘書を務める。占領中, 彼女はニースに滞在し, 内陸部にいたプレヴェールともコンタクトを取ることとなる。1967年没。
- 9) 1909年ブルジョワ家庭に生まれる。法律と哲学を修めた後, 職を転々とする。当時プレヴェールと近い関係にあった。役者を志し, 「10月グループ」に入り, 1933年, モスクワへも同行する。その後共産党に入党し専従となる。「フランス労働者演劇連盟」において重要な役割を果たし, 共産党制作の映画にも深くかかわる。戦時中ナチスの映画会社「コンチネタル」社で le Chanois と名乗ってシナリオライターとして働く。後にそのことで非難を浴びる。1985年没。
- 10) 1931年の夏に文芸誌『コムルス』 *Commerce* (cahier XXVIII) に初出。
- 11) 1930年に文芸誌『ビフュール』 *Bifur* (numéro 7, décembre 1930) に初出。この作品に関しては, 拙論「プレヴェールの『家族の思い出, あるいは看守天使』をめぐる」(『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』第42号, pp. 51-67, 2008) を参照されたい。
- 12) 1909年生まれ。「10月グループ」の活動に参加。1933年11月に共産党を離党。後に文芸誌の創刊者, 文芸批評家, 小説家 (*Regrets de Paris* で1945年 Deux Magots 賞を受賞) として文学活動に従事。
- 13) 1911年ブルジョワの家庭に生まれる。「10月グループ」の時期, ジャン・ルベスの伴侶となる。早くから政治活動に身を投じ, 共産党に入党するも, モスクワ旅行の後1933年に離党。最後まで「10月グループ」の活動に忠実に従った。
- 14) 1906年生まれ。モンパルナスのカフェでプレヴェールとその仲間たちと出会う。当時彼は有能なグラフィックデザイナーであり, 『ブラボー』 *Bravo* 誌の組版工をしていた。その経験を生かし, 「10月グループ」の演出家となり, マルセル・デュアメルの前伴侶ガゼル Gazelle とともに劇団の衣装も担当する。劇団のために数編のテキストやシュプレヒコールも残している。後に衣装係としてピエール・プレヴェールとマルセル・カルネの映画助手も勤める。本名は Lou Bonin であったが, ロシア風の名前チムコウを名乗る。1979年没。
- 15) Carole Aurouet: *op.cit.*, p.52.
- 16) 社会主義労働者インターナショナル・フランス支部 Section française de l'Internationale ouvrière (SFIO) の社会主義者たちにより発刊され, 1927年に日刊紙となる。レオン・ブルム

がその主幹と論説委員を務める。

- 17) 1906年にパリに生まれる。フランス映画とイギリス映画に深くかかわり、雑誌 *Revue du Cinéma* の寄稿者たちを通じてプレヴェールと知り合う。生涯シュールレアリスム運動に参加し、1937年の *Violon d'Ingres* の撮影においてイヴ・タンギーと出会う。*L'affaire est dans le sac*, *Le Crime de M. Lange*, *Une partie de campagne* などの映画で名演している。1979年没。
- 18) 1861年にオーギュスト・ネフゼ Auguste Nefftzez により創刊された日刊紙。第三共和制政府の公式機関紙。
- 19) 1916年にギュスタヴ・テリ Gustave Téry により創刊されたパリの日刊紙。非共産党系の左翼の機関紙。
- 20) 1903年生まれ。シュールレアリスム運動に参加し、マン・レイとともに写真家として活躍。1961年没。
- 21) 1905年牧師の息子として生まれる。兄のマルクとともに映画監督となる。1932年にセレスタン・フレネの世俗教育共同組合のために制作したマルクス主義的映画 *Prix et profits* にはプレヴェール兄弟も出演している。彼の初期の長編映画 (*Une si jolie petite plage*, *Sortilèges*) は高く評価されながらも、映画監督としてのキャリアは長続きしなかった。シモーヌ・シニョレの最初の夫でもある。1987年没。
- 22) *Jacques Prévert Octobre-Sketches et chœurs parlés pour le groupe Octobre (1932-1936)*, *op.cit.*, p.35. 参照。
- 23) *Ibid.*, p.35. 参照。
- 24) 1900年生まれのシュールリアリスト。デスノスやプレヴェールとともにブルトンと決別する。映画の吹き替えの仕事でマルセル・デュアメルに協力する。1973年没。
- 25) Carole Aurouet : *Op.cit.*, p.53.
- 26) *Ibid.*, p.53.
- 27) *Jacques Prévert Octobre : Op.cit.*, p.39.
- 28) *Ibid.*, p.50. 参照。
- 29) *Ibid.*, pp.52-57. 参照。
- 30) *Ibid.*, p. 128. 参照。
- 31) *Ibid.*, p. 130.
- 32) *Ibid.*, pp. 130-131.
- 33) *Ibid.*, p. 131.
- 34) *Ibid.*, p. 135.
- 35) *Ibid.*, pp. 135-136.
- 36) アンドレ・シトロエンは1933年、自社の宣伝を大々的に行うため、エッフェル塔に大きな Citroën の文字を光で浮かび上がらせていた。この事実を暗示しているシーンである。
- 37) 1900年生まれ。1932年から1951年までシュールリアリスム運動に積極的にかかわる。デザイナー、画家、オブジェの制作者として活躍。ニューヨークとブタペストでもデザイナーとして仕事する。「10月グループ」とともにシルヴァン・イトキヌ Sylvain Itkine の主催した「3月グループ」の活動にも参加。1973年没。
- 38) *Jacques Prévert Octobre : Op.cit.*, pp. 137-139.
- 39) 註1) の *Mon frère Jacques par Pierre Prévert* 参照。
- 40) Carole Aurouet : *Op.cit.*, p. 54. 参照。